

天秤ふいご

天秤ふいごは、シーソーのような基本的なふいごを発展させたものである。糸原家に伝わるたたら歴史の記録『鉄山旧記』によれば、この技術が初めて使われたのは 1691 年のことである。

製錬の 3、4 日間に渡ってふいごを汲み続ける骨の折れる仕事は、バンコと呼ばれる労働者に任された。バンコは交代でふいごの中央に立ち、両足を動く板の上に乗せた。吊り下げられたロープを握り、片足ずつ体重をかけ、木製のペダルを踏むたびに炉に空気を送り込んだ。炉とふいごの間には土壁が築かれ、高さ 2 メートルにも達する炎からバンコを守った。炉の片側にいる鞆からは相手の動きが見えないため、彼らはしばしば歌を謡い、長い製錬の間、ペース（と士気）を保った。

実物大のふいごのレプリカの展示があり、バンコの仕事がどのようなものであったかを体験することができる。天秤ふいごを自由に動かしますが、バランスを取るために必ずロープにおつかまりください。